

---

### 被災地の在宅医療支援～みんなで繋いだ3か月～

(松浦幸子、全国自治体病院協議会雑誌 50: 1864-1868, 2011)

2013年10月25日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

この論文は島根県の隠岐広域連合立隠岐島前病院の看護師が東日本大震災の被災地で立ち上がった気仙沼在宅支援プロジェクトに参加することになった時の報告をしたものである。

気仙沼在宅支援プロジェクトとは、自主的に市内を巡回した医師が、被災を免れた家に多くの高齢者が取り残されていることを憂慮し、医療関係者に協力を呼びかけてできたものである。医療、健康相談、口腔ケアのチームに分かれて在宅患者さんを対象に訪問診療を行っていた。

震災後8週間が経過した5月初旬の被災地は、入院していた患者さんの退院が増えていた。また、停電の影響で発生した在宅での褥瘡患者も増え、在宅医療の必要性が求められた。そのなかで、医師と看護師が組んで巡回医療を行うにあたり、看護師の数が不足している、継続的な派遣を求めるといった情報が聞かれた。そこで島前病院は

- ① 1名ずつであれば1週間交代で3～4ヶ月の継続支援ができる状況である
  - ② 日頃、離島医療を担っていることから、総合的にどのような状況でも動ける看護師がいる
  - ③ 自分たちも手伝いたいというスタッフの思いがある
  - ④ 医療スタッフとして東北の支援をすることに院長らの理解があること
- から5月9日よりプロジェクトに1名ずつ継続派遣を決定した。

活動を開始するにあたり、先に現地で活動をしていた看護師から「在宅医療の経験がなく戸惑いながらの毎日である」との声を聞いていた。島前病院の看護師は日頃から実践している在宅医療の経験から少しでもサポートしたいという気持ちが強くなった。また、スタッフを継続派遣することで、それぞれが現地で活動するための情報は、次のメンバーに自分たちが申し送ることで、現地でマネジメントしているスタッフの負担を減らせるよう努めた。そのため、活動中は「申し送りノート」を準備し、現地の状況、業務内容、患者さんの家族の様子、活動での感想などを自由に書いていた。

島前病院の看護師は継続的にかかわれることから、医療者の訪問による患者さんの家族の緊張を少しでも和らげるために、島前病院の担当地区を割り振ってもらい、気仙沼市本吉地区を中心に活動した。

活動は5月9日から8月5日まで1名ずつではあるが3か月の継続支援を行った。当初は262件あった訪問診療も7月末には27件と終息期に入った。プロジェクトとしての活動としても8月末で決定したため、島前病院としての支援も8月5日で終了することに決定した。5月、6月、7月とその時期によって被災地の状況、在宅患者数、

プロジェクトの運営状況も変化しておりメンバーの体験もそれぞれ異なるが、全員が大震災の悲惨な状況に言葉にならないものを感じた。

被災地での活動は申し送りノートとともに東京で先発メンバーが後発メンバーに引き継ぐことで現地の様子が把握できたので、すぐに活動することができた。島で地域医療を実践しているため業務に関しては不安や戸惑いはなく自然に動けた。訪問先では患者さんやご家族の話をしっかり聞き、本当の思いも引き出すことができた。病棟経験のみで在宅医療の経験のない若手看護師は活動に参加したことで「入院中の患者さんの在宅生活への意識が変わった」「島に帰ってからも日々の病棟業務において在宅生活というゴールを常に考えて行動するようになった」「自分に不足しているものに気づき、新たな目標ができた」など被災地での支援活動を終えてからのスタッフの意識行動に変化が見られた。

このような経験ができたのも、被災地に出かけるスタッフ、残って現場を守ったスタッフ、ささやかではあるがみんなで繋いだ支援活動だった。支援というアクションを起こしたからこそ多くの学びがあった。思いだけでは何も変わらない、得るものもないということを証明するものであった。

組織として取り組んだ支援活動、プロジェクトでの多くの皆さんとの出会い、忘れることのない大震災を通して「伝える」「考える」「行動する」とはどういうことか大切に考え直してみたい。